

書評・浅沼和典『ハリントン物語』（人間の科学社、1996年）

掲載紙：『明治大学広報』第413号（1996年3月1日）「本棚」欄

一七世紀イギリスの政治思想家といえば、ホッブズとロック。しかし、両者に比肩しうる主張を展開した人物に「忘れられた思想家」ハリントンがいた。

本書はそのハリントンの本邦初の伝記である。戦後まもなく、イギリス革命研究でハリントンに「惚れた」筆者が、三〇年ぶりに現地イギリスで彼の生涯を丹念に調べ上げた。

筆者によれば、ハリントンの思想の柱は、経済史観と共和主義論からなる。それらを盛り込んだのが大著『オーシアナ』である。

マルクスを彷彿させる土台と上部構造というロジック。ハリントンは、絶対君主制は当時の土台にもはや合致しないとみて、公職の交代制を提唱する。そんな彼がチャールズ一世と親交を結び、息子チャールズ二世によって投獄される。そして精神錯乱の最期。

とはいえ、本書は決してカタイ学術書ではなく、挿入された写真なども楽しい。三〇〇年以上前に埋められた秘宝を異国に求める宝探しを読むようである。

ハリントンは、深い読書と広範な旅行を真理探求の信条とした。一読すれば、筆者自らも実はそれを実践しているのがわかる。ハリントンの名を、筆者の講義ではじめて知った一人として胸にぐっと来る。